

サクランソウとの出会い

司会 鷲谷さんは、子どもの頃から生きものが好きだったんですか。

鷲谷 好きでした。だけど、大学で勉強しようという気になったとき、生物の単位は細胞だから、それを理解しなければと思って。細胞学の研究室に入りました。五年間培養細胞を材料として、細胞内器官に含まれる酵素を調べたりしていたのです。でもそのうちに、これは私が止めても誰かがやる研究かな、と思うようになりました。それで、野外の現象を考えるのに面白い実験室での仕事はないかと種子の生態の研究を始めました。そしてはじめての野外調査でサクランソウに出会ったんです。

そして、まずは研究しているものを残したいという気持ちから、保全のほうに入りこんでいきました。川那部 一時期、特別天然記念物になっている地域のサクランソウを保護するのに、完全に放っておくのが良いかどうかという議論がありましたね。

鷲谷 荒川の河川敷です。あのあたりは、江戸時代から昭和のはじめまで、いちばん良い状態だったと思うんです。大水が出て植物をなぎ倒すことのほかに、植物の力を大量に刈り取ることがあって、この両方の攪乱が適度だったのです。こうした人と川による攪乱の意味を、野外調査を始めてすぐ感じる事ができました。

川那部 本来なら自然がうまく攪乱してくれていたのに、人間がそれを止めてしまつて。それでも以前は、それに人間が手を加えて、攪乱していたのですね。それすらなくなつてしまつた。

鷲谷 江戸時代には多くの園芸品種がつくられました。またサクラのお花見だけではなくて、サクランソウのお花見も行われていたのです。

川那部 そうでした。思い出しました。江戸文学にも出てきますね。

鷲谷 そのうちにセイヨウマルハナバチの野生化問題が起こりました。外来種のセイヨウマルハナバチを花粉媒介に使うことについては、花とマルハナバチの共生系を崩してしまう可能性があるという意見がありまして、私も心配していたんです。それが、北海道のサクランソウ自生地近くで、一九九六年頃に野生化してしまつたんです。うちの大学院生が巣を見つけたもので、今でもずっとモニタリングしています。

私はサクランソウを保護するために、私設のサンクチュアリ(保護区域)を作っているんですけれど、そこでつい一週間ほど前に、セイヨウマルハナバチがモズの「はやにえ」になつてきているのを見つけてしまったのです。これまで「はやにえ」のマルハナバチを見たことがなかったのですが、その最初が外来種だったので、もう頭に血がのぼつてしまつて。川那部 それは、それは。

外来生物

—つれてこられた生き物たち—



2003年6月14日(土) 琵琶湖博物館館長室にて

司会進行 / 中井克樹

いまいちばん身近なところにある植物は、北アメリカの植物なのです。

日本列島における外来植物問題

川那部 とところで外来植物の場合には、立派な自然が残っている場所には入り難いといわれますが、鷲谷さんもそう思われますか。

鷲谷 そう思います。また以前は、仮に外来種が定着しても、自然の一部になつている面がありました。

しかし今は、外来種の入りかたが変わつてきました。人間がそれを野外に、大量に放出しています。

例えば、アレチウリやオオバクサ。この二種は、北アメリカからのダイズとか、飼料・穀物などの輸入に由来しているのですが、本来は大きな種子なので分散力が小さいのです。しかし今では日本に大きな群落ができてしまつていて、そこから土を工事で動かすのでどんどん広がっていきます。また穀物の輸入には、多少は不純物が入つても良いことになっていきます。市場性を重視する貿易では、不純物がいくらかあつてもそ

東京大学農学生命科学研究科教授

鷲谷 いくみ氏

日本生態学会次期会長。
著書に『生態系を蘇らせる』『日本の帰化生物』
(共著)『保全生態学入門』
『遺伝子から景観まで』
(共著)などがある。



のほうで経済的なんですね。しかしこの不純物はというと、それが穀物畑の雑草の種子なのです。

オオバクサもアレチウリも、アメリカ合州国の川の下流部が、もともとこの生息場所なのですが、そこからまず大掛かりな農業をやつていけるアメリカの農地に進出し、それが穀物に混じつて日本に来るのです。そういう雑草の種子が、捨てられて拡がります。それから都市で出たゴミは、地方に持つていって捨てられたりしますが、そのとき、隠すために都会の土と一緒に持つてきて捨てるのです。茨城県のことですが、わりあ

い田園環境が残っていて、外来種なども少ない、気持ちの良いところだったのに、ある時突然、オオブタクサの群落ができる。そこは何かというところ、谷津を埋めてゴミを捨てたところなんです。

川那部 なるほど。大量に持ち込まれると、全く違ったことが起きるのでですね。それにしても農業地帯の外来生物が、都市のゴミ問題に直結するとはね。

牧草や外来草本による花粉症など

鷺谷 牧草の問題もあるんです。花粉症の原因植物として、いまだ本の人たちは、スギやヒノキの花粉をすくく気にしていらつしやるのですが、花粉症の発生時期についての資料を見ますと、夏とか秋までずっと続いていきます。そうすると、外来牧草やオオブタクサの仲間はかなり花粉症の原因として、人の健康にも問題が出ていると思うのです。実際に東京では、多摩川の土手の近くの小学校や中学校で、外来牧草による集団花粉症も起こっています。行って見ると驚きますが、延々何十キロと土手が、ネズミムギとかネズミホソムギとか、そついつた外来の牧草ばかりなのです。「草は刈らないで欲しい、子どもたちの遊び場だから」とおつしやる学校の先生がいらつしやつたのですが、外遊びが好きで草原で遊ぶ子が、病気になるてしまつたのです。

しい「植物だつたのですが、一時期さかんに使われた除草剤のパラコートに対する耐性を獲得してしまつたのです。それで、農業上とても問題のある害草になってしまいました。

自然復元の生態学

川那部 先年多摩川の土手などには、在来植物も少しは残っているのですか。もしそつだとすると、そついつく牧草はどつすれば良いと、鷺谷さんは思われますか。

鷺谷 全部取り尽くしてしまつべきだと思ひます。現実には、取つても取つても出てきて、といつことになるかもしれせんが、どついつく自然が日本の、それも例えば田園の自然だつたかを、覚えておられる方や意識していらつしやる方が、今では少なくなつてしまつていて、そのこと自体が問題だと思ひます。自然とかかわる文化が継承できなくなりそつなのです。いまいちばん身近なところにある植物は、北アメリカの植物なのです。文化の断絶が起こる可能性が大いいわけですね。

生きものだつたらなんでも良いといつことではなくて、自然の長い歴史、その風土の中で生活してきた人々と生きものとの関係、「人と自然との合作」ともいえる自然と、それに根ざす文化、それを後の世に伝えていく必要があると思ひます。その伝え方として、少なくともその一部を取り戻すことが必要です。そついつく点から自

対談 館長

然復元のための生態学というのが、必要になつていっているのではないでしようか。

川那部 まさにその通りですね。「生物の性質は関係性の歴史の産物に他ならない」と、十年ほど言い続けて来た私ですが、『生態系を蘇らせる』の評にも書いたとおり、あなたにはまことに見事に書かれてしまいました。自然復元の

必要性をいふ人は、幸いにも増えていますが、このことを含めて考へている人は、まだ少ないですね。

鷺谷 ええ。そして、そのほうが重要なのだと、私も思っています。

川那部 「全部取り尽くしてしまふべき」だといつご意見にも、琵琶湖の外来魚について考へれば考へるほど、賛成したいと思ひます。じつは十年ぐらい前までは、ちよつと考へが違つていたのです。琵琶湖の在来の魚が減り始めたのは、オオクチバス(ブラックバス)やブルーギルが入る前からで、その要因は明らかに、沿岸を中心とする自然環境の変化です。だから周りの環境をきちんと復元して、在来種に適合したものにすれば、時間はかかるかもしれないけれど、外来生物は減つてきて、在来種が復活するだろうと考へていたのです。

種が復活するだろうと考へていたのです。

ところが何年か前から、「はしかけ」さんと呼ばれる琵琶湖博物館のあるグループの人たちが、田んぼの溝まで含めて小さな川などを調べて得た結論は、ごく少数の例外を除いて、在来魚の生存とオオクチバス・ブルーギルの存在とは反対になり、それは在来の環境が残つているかどつかとは、あまり関係がないといつことになつたのです。

歴史は、時間の流れは、そのままのかたちでは戻らないのです。環境が良ければ、これほどまでの外来魚の繁栄はなかつたでしようが、ここまで至れば、もう物理的・化学的な環境復元だけではどうにもならない。外来種の取り返しへの努力なしに、生態系の

復元はあり得ないと、思つようになりました。

鷺谷 植物が侵入してくるときにも、まつたく同じことが言えると思ひます。

それに、もはやあらゆる生態系があまりにもひどいことになつてしまつていますから、外来種を駆逐して在来の多様な種を維持していく生態系を復活させるためには、「伝統的な管理」だけではなくて、生態学を踏まえた科学的計画が必要だと、つくづく感じています。

司会 鷺谷さんは、霞ヶ浦などの復元にも、たいへんな力を貸していらつしやいますね。今後も活躍を期待しております。

* モスが虫やカエルなどを捕つて、えさとして小枝などに突き刺しておくもの。

外来種の取り尽くしへの努力なしに、生態系の復元はあり得ないと思つようになりしました。

琵琶湖博物館館長
川那部 浩哉

